

梅 沢 さん を 送 る

鳥 海 光 弘 (地質学教室)

梅沢さんは今年3月末日をもって御退官されま
す。梅沢さんは昭和31年12月に非常勤の職員とし
て理学部地質学教室に来られ、昭和34年に技官と
して当教室に勤務されることになりました。以来
32年間にわたり岩石・鉱石や化石標本、実験材料
などの教育・研究用薄片、研磨面、切断面の製作
にあたっられました。

岩石や化石標本、鉱石標本の同定、構成鉱物の
組織や構造、化学組成の測定などは通常厚さ30ミ
クロンの岩石等の薄い板をプレパラートの上にお
せ、適当な樹脂で固定して、偏光光源を用いた光
学顕微鏡（反射・透過）によって観察したり、研
磨表面をカーボンや金などでコーティングしてS
EMやTEM、XMAなどで微細な構造の観察や
化学分析を行う。このように地質学や岩石学、鉱
物学、又は古生物学などの地球科学の研究にとっ
ては不可欠の試料を製作して頂きました。

岩石・鉱石・化石・実験材料、まれに砂や泥な
どの固結していない試料の薄片製作にはきわめて
高度の熟練した技術が必要とされる。それは彼の
扱う岩石や他の標本や試料がたいへんに多様であ
り、いろいろな程度に硬さのちがう鉱物がいろい
ろな程度に接合しあっているので、切断、研磨、
薄片化の作業の仕方がまるで異なっていることに
よっている。また1970年代以降はXMAの導入によ
って研磨した岩石薄片を作成するというより高度
の技術が必要となった。極端な場合には、砂を固
めてから薄片にしたり、水に溶けてしまう岩石で
は研磨や切断・切削には油を用いたりするのであ
る。

しかし、たぶん最も熟練度の高い作業は最終30
ミクロンの厚さをそろえて、平行に仕上げること
や、硬さのちがう鉱物を含む鉱石を平面上に磨く
ことにあるのではないだろうか。実際、自作する
とすぐ判るが、ターンテーブルの上で切削すると
大体は平行平板とはならない。それを修正しなが
ら、最終的に30ミクロンでとめるのは大変むずか
しい。

梅沢さんはこの薄片や研磨製作のプロである。
職人なのである。彼は早朝に来て、岩石薄片製作
室に入り、切断し、削り、研磨する。この作業工
程を毎日きちっと守っておられる。彼の作った岩
石薄片や研磨面は20万枚を越える。多くの世界的
業績をあげられた故久野久先生、故渡辺武男先生、
都城秋穂先生、岩生周一先生、立見辰雄先生らは、
海外調査、野外調査からもどられると、いつも大
量の岩石や鉱石標本を彼に託した。するときちん
と安定した厚さのきれいな薄片や研磨面がつくら
れて来るのである。これらの試料はいまでも学生
実習用などに多用されている。多くの研究者はこ
うして彼の作った岩石薄片や鉱石研磨面などに
よってアイデアを練っていた時代であった。

彼の性格は職人氣質の頑固一徹という風である。
4年程前に地下の居室は具合がよくないのでと
いうことで3階に居室を移したらという申し出を
きっぱりと断って「下が仕事場です」との事であ
った。またある時、油で薄片を製作しておられる
とき、手がややアレルギー的になっているので、
油が具合悪いのですかと聞くと「そうだ」と答え、
では少し油を必要とする試料作成を中止したら

かがですかと尋ねたら、むっとして「これは仕事です。」と答えられた。

梅さんは酒が好きである。教室の何人かは彼と時々飲んでた。大酒飲みというわけではない。静かに飲むのである。赤ちょうちんが似合う。ただ最近健康のため少しひかえていると聞く。少し残念である。退官されたあとも、好きな酒を飲

みつつ20年以上も前の、藤縄さんや野崎さん、久野先生や渡辺先生の頃に想いをはせたときには教室に来て頂きたいものである。

梅沢さん大変ありがとうございました。また御苦労様でした。御健康に留意されて、たまには教室に足を運んで頂きたいと思います。